View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

# <研究ノート> 北海道における地域教育の考察 ： 阿寒湖畔の小中学校におけるアイヌ文化学習を中心に



| | |
|---|---|
| 著者 | 上野 昌之 |
| 雑誌名 | 埼玉学園大学紀要. 人間学部篇 |
| 巻 | 18 |
| ページ | 273-280 |
| 発行年 | 2018-12-01 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1354/00001177/ |



Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

# 北海道における地域教育の考察
## ― 阿寒湖畔の小中学校におけるアイヌ文化学習を中心に ―

A Study of Regional Education in Hokkaido
Ainu Cultural Education at the Elementary and Junior High School near Lake Akan

上　野　昌　之
UENO, Masayuki

### はじめに

本論は北海道阿寒湖畔地域に小中学校で行われているアイヌ学習についてその意義とそれがアイヌ民族の子どもに及ぼす民族意識の形成と自己肯定感の育成状況を明らかにし、アイヌ学習を行う上での方向性を考察することである。

対象となる阿寒湖畔の学校の背景は以下のようになる。阿寒湖は北海道の道東に位置し、釧路市内から60㎞ほど離れた阿寒摩周国立公園名にある湖である。湖畔は明治期より登山や温泉の観光の拠点として開発され、温泉街となっている。町の人口はおよそ1300人、世帯数767（2018年１月末）で、主な産業は観光業である。阿寒湖畔の3600haに及ぶ森林や温泉地街などは前田一歩園財団が所有し、土地資源の維持管理を行っている。阿寒湖温泉街の西部には「アイヌコタン」と呼ばれるアイヌ民族の人々が居住する一角がある。戦後、前田光子がアイヌの人々の自立のために無償で土地を提供し、そこでアイヌ民族の人々が居住しながらお土産の店舗を経営したり、歌や伝統舞踊を演じたりする劇場を経営している。またチセ（家）やヌササン（屋外祭場）などの伝統的施設もおかれている。「アイヌコタン」やその周辺にはアイヌ民族の世帯が現在40以上あり、変動はあるものの120人ほどが居住している。アイヌ民族の子どもをはじめ温泉地街の子どもは、みな釧路市立の阿寒湖小学校、阿寒湖中学に進学する。

子どもたちが通う釧路市立阿寒湖小学校は明治45年に徹別簡易教授所属湖畔特別教授場として設置された。いったん廃止されたが、大正12年再設置され、昭和８年阿寒尋常小学校となる。戦後阿寒町立阿寒湖小学校と改称され、徹別中学校阿寒湖分校（のちの阿寒湖中学）が併設された[1)]。

### １．釧路市阿寒湖畔地区の教育

釧路市の教育委員会は、釧路市教育行政方針に基づく基本目標を定めている。2017（平成29）年度には以下のようなものである。

「ふるさと釧路を愛し、活力ある街に奉仕する人づくり、伝統と文化を大切にし、主体的に学び続ける人づくり、進んで人とかかわ

キーワード：アイヌ文化、民族共生、地域教育、観光
Key words ：Ainu culture, ethnic symbiosis, regional education, tourism

り豊かな心をはぐくむ人づくり、自然に親しみ健康でたくましく生きるひとづくり」[2)]。

こうした基本目標が掲げられ、釧路市教育基本計画が作られている。

教育基本計画の基本姿勢は、「生きる力をはぐくむ学校教育の推進」、「育ちと学びを支える教育環境の充実」、「新たな学びを創る生涯学習の推進」となっている。この中の「新たな学びを創る生涯学習の推進」では、「主体的な学びの推進」「自然との共生と文化芸術の振興」「健全な心と身体をはぐくむ活動の推進」がうたわれ、特に「自然との共生と文化芸術の振興」で文化財の保護とアイヌ文化の保存・継承が項目に挙げられえている。そこで地域教育では、マリモやキタサンショウオウの保護研究事業や「イオル再生事業の推進」[3)]が行われるとともに、学校教育では「アイヌ文化の教育普及」が実施項目として位置づけられている。

これを受け阿寒湖小学校ではアイヌ文化学習がカリキュラムに位置付けられ行われている。学校教育でのアイヌ文化学習が行われるようになった背景には、一つには学校近隣に「アイヌコタン」があり、その周辺からアイヌ民族の子どもたちが通学しているという点が大きい。アイヌ民族の子どもたちは戦後「アイヌコタン」ができてから人数も増えていった。和人の子どもたちとともに通っていたが、人数的には少なく、民族性に起因するいじめや差別を受けていた時期も長くあった。アイヌ文化学習が以前からあったわけではなく、アイヌ民族への理解はさほど進んではいなかった。近年アイヌ文化の学習が行われてきた背景には、アイヌ民族の置かれた立場の変容と湖畔の経済的背景が大きいものと考えられる。

## ２．アイヌ湖畔の産業とアイヌ文化

阿寒湖畔は主に観光産業で成り立っている町である。戦前から風光明媚なこの地は昭和30～40年代の北海道観光ブームで脚光を浴び、観光客も増えた。当時からアイヌ民族も観光産業についていたが、零細な土産物店であったり、温泉街での不安定な労働者であった。そこで阿寒湖畔のアイヌ民族の代表的な人物である山本多助や観光協会、温泉街の代表者が中心になり、阿寒湖の目玉になる観光事業の創設に取り組んだ。その結果生まれたのが、現在にも続くまりも祭りである。まりも祭りは、秋の紅葉シーズンに観光を盛り上げるためにアイヌ民族が中心になって行うイベントである。アイヌ民族にマリモに対する信仰はないが、アイヌ民族の持つ独特の自然観と天然記念物のマリモ保護を合致させ作り出された祭りである。この行事が盛況になると、アイヌ民族と温泉街とは共存関係が深まり、アイヌ民族やアイヌ文化が阿寒湖観光には欠かすことのできない要素となっていった。「アイヌコタン」での歌舞演劇やアイヌ民族が彫刻する熊の置物などは観光の重要なファクターとなった。このように阿寒湖でのアイヌ民族の存在感は増していったが、社会的にも経済的にもいまだ弱かった。

アイヌ民族にとってまりも祭りは民族的なつながり、文化継承上では大きな意義を持つものでもあるが[4)]、民族的な国内での社会的地位を高めたのは、1997年に施行されたアイヌ文化振興法である。民族文化の継承振興や国民への啓発普及事業を通してアイヌ民族や文化の認知度は高まった。様々な事業を通して全国的に展開され、道内でもアイヌ民族文化の普及が図られた。2007年には先住民族の

権利に関する国連宣言が採択され、日本でもアイヌ民族を先住民族と認める流れとなった。こうした一連の制度的な変化が社会状況を変えアイヌ民族の社会的認知も高まったといえる。

政府は観光立国を目指す方針を打ち出し、国内の有力な観光地はその整備を進めていた。阿寒湖畔も「国立公園満喫プロジェクト」や「観光立国ショーケース」などの政策対象地に指定され、新たな挑戦が求められている。大規模なアイヌ劇場「シアター・イコロ」が作られ、従来の伝統歌舞ばかりでなく新たな出し物も創作されている。また新たなイベントも企画されている。こうした観光事業は観光温泉ホテルとタイアップしたもので、阿寒湖畔の観光事業を一層活性化させていくものと期待されている。

このように国内の制度や政策が阿寒湖畔というローカルな地域に住むアイヌ民族の人々の生活にも大きな影響を及ぼしている。アイヌ文化が観光要素として活かされることで、地域経済が高まり、アイヌ文化は阿寒湖観光の中核として位置づけられてきたことがわかる。こうしたなかで、学校教育の中でもアイヌ文化の教育が行われるようになっていったと考えられる。

## ３．阿寒湖小学校とアイヌ文化学習「アイヌ文化名人」

阿寒湖小学校は街の中心から西に0.5㎞ほど離れており、周囲は森に囲まれた自然の豊かな地である。各学年１クラスで、阿寒湖畔に居住する子どもが通学する。アイヌ民族出身の子どもの人数は未調査のため不明であるが、コタンから通ってくる児童や周辺からも通学している子もおり、学校では少なくとも⅓ほどはいるのではないかと捉えられている。

阿寒湖小学校では、３年生から６年生まで総合的な学習の時間に「アイヌ文化名人」という単元を作り年間14～16時間でアイヌ民族の文化学習を行っている。調査をした2017年度で４年目になるという。これは地域の文化素材を学習する一つとして行われるものでる。この時間に行われる主たる学習は、アイヌ民族の古式舞踏を習得し、そのプロセスの中でアイヌ文化の良さや伝統、学ぶ意義を理解し地域の文化として理解することにある。習得した古式舞踏は「アイヌコタン」の「シアター・イコロ」で公開発表会を行うことになる。

「アイヌ文化名人」の授業は11月の後半に５日間で集中的に行われる。講師はアイヌ民族文化財団のアドバイザー派遣制度を利用して、阿寒アイヌ文化保存会の方々を３人招き指導を受ける。演目は４つ。ウタリオプンパレワ（輪踊り）、キツネの踊り、弓の舞、鶴の舞である。いずれも古式舞踏の中で著名なものである。３年から６年までの全員が各役割を演じる。３年生は初めての参加となり、４年生も昨年演じたものと役柄が異なる。5・６年生は下の学年に指導する役割を受け持つことになる。

**表１　＜2017（平成29）年度の在籍者＞**　　**（特別支援児童６人を含む）**

| 年次 | １年 | ２年 | ３年 | ４年 | ５年 | ６年 | 合計（人） |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 男 | 5 | 7 | 3 | 4 | 6 | 4 | 29 |
| 女 | 5 | 6 | 10 | 5 | 5 | 4 | 35 |

**表２　＜演目と分担＞**

| 輪踊り | 舞・唄 | 全員 |
|---|---|---|
| キツネの踊り | キツネ | ３年男子、女子全員 |
| | 狩人 | ４・５・６年男子 |
| 弓の舞 | 舞 | ４・５・６年男子 |
| | ウココセ（囃子・手拍子） | ３年男子 |
| 鶴の舞 | 舞・唄 | 女子全員 |

アイヌ出身の子どもは、幼い時から「アイヌコタン」の催しや地方での催しに参加しており、実際に見様見真似でできる者もいる。和人の子どもには馴染みのないものである。

この活動の流れは、以下のようなものになる。実際に練習をする前に保存会の会長から古式舞踏の基礎知識と実演する踊りの説明を受ける。前年度の発表会の映像を見て、踊りや段取りを確認する。その後使用する小道具を用意し、衣装を合わせなどの準備を行う。演目ごとに３日間（毎日２時間）の練習を重ね、前日に舞台でのリハーサルを行い、当日を迎える。この間、日ごとに記録・感想を書かせ、活動を振り返らせる。発表後の事後指導として各学年ごとに、模造紙発表、パソコンによる活動紹介、新聞紙面作りなどを行いまとめ発表する。

踊りの発表は保護者やアイヌ民族文化保存会の方々が見守る中で１時間にわたり演じられた。児童代表の挨拶、保存会会長の踊りの説明のほか、最後には３年から６年までの学年代表によるこれまでの活動の感想が述べられた。まとめでは次のような感想が述べられている。「鶴の舞で友達や５年生としてしっかり足のステップがそろってきたので良かった。」「練習してどんどん踊りに慣れていった。難しいところもあったけど、好きになって楽しかった。」「保存会の人の話から弓に神様がいることがわかった。今度、どんな神様がいるのか聞いてみたい。」「アイヌ語の意味について調べたい。」[5)]

このように古式舞踏の取り組みを通してアイヌ文化についての理解を深めるとともに、さらにアイヌ文化を深く知りたいという興味関心が高まっているのがわかる。

以上のように阿寒湖小学校ではアイヌ文化名人というアイヌ文化学習が行われている。児童はアイヌ民族出身か否かを問わず全員が古式舞踏を学び発表する。その学習プロセスの中でアイヌ文化の自然観や精神を学び、地元にいる阿寒湖畔のアイヌ民族の理解につなげている。子どもたちは、これまで見聞きした経験を文化保存会の方々の指導により明確に自分のものとして吸収する機会となっているのがわかる。年長者は後輩に教えることで自己有用感を高めていくことができる。総合的な学習の時間は年間72時間ありアイヌ文化名人に割り当てられた時間は２割程度ではあるが、ふるさと学習の一つとして阿寒湖畔におけるアイヌ民族との共存共栄の精神を養っている。

## ４．阿寒湖中学校とアイヌ学習「ふるさとタイム」

阿寒湖中学は1947（昭和22）年に徹別中学阿寒湖分校として開設され、３年後阿寒湖中学校と改名する。2017年度末の生徒数は27名、10年ほど前はこの倍の生徒数はいたが、近年

は微増、微減の状況にある。アイヌ生徒数は調査を行っていないが、「アイヌコタン」からの子どもも少なくない。小規模な学校で、子どもたち同士は幼稚園、小学校時代から持ち上がりのため、出自などは分かっており、教員でもほぼ把握しているようである。

アイヌ文化に関係する学習は主に地域連携教育の一環として行われている。「まりも踊り」、「アイヌ文化教室」、「木彫教室」などが総合的な学習の時間に「ふるさとタイム」として設定されていたり、特別活動として行われている。また、伝統文化の理解と地域の一員としての自覚を高め、郷土に誇りを持つことを目的に、湖畔のイベントまりも祭りに参加している。まりも祭りの中に「まりも踊り」というイベントが組み込まれており、地元観光協会と連携し地域の人々とともに、生徒・教職員一同が参加し街中を踊り歩く。まりも踊りは和風でアイヌ文化とは直接はかかわらないが、まりも祭り自体が地元のアイヌ民族の人々が主体となる祭りでもあり、それに自らも参加することで、地域の人々やアイヌの人々との連帯をつながることになる。地域を支える意識を学ぶ上での体験学習とすることになる[6)]。

「アイヌ文化教室」は１・２学年の体験的学習として10月から11月の２週にわたりおこなわれる。アイヌ民族の舞踏やムックリ（口琴）の演奏を通してアイヌ民族の文化に触れ、ふるさとの文化を理解し、誇りを持たせることが学習のねらいにある[7)]。アイヌ民族文化財団のアドバイザー派遣を利用し、阿寒アイヌ民族保存会の方を講師として招聘し指導を受ける。１日目はアイヌ民族についての講話を受け、アイヌ文様や歴史学習を行う。その後アイヌ民族の楽器ムックリ演奏の実習を受け、校内での発表会を行う。アイヌ民族出身者でも必ずしもムックリ演奏が身に付いているわけではなく、その他の生徒にとっては初体験だったりする。ムックリの音色は「アイヌコタン」の近くでは放送でも流れているだけによく耳にする音楽ではあるが、実際演奏してみて、音が出ない難しさを経験するようである。こうした機会は身近にあっても普段経験することがないアイヌ文化を知る上で貴重な学習時間となっている。

「木彫教室」は1981（昭和56）年から37年つづく体験学習である。阿寒湖では木彫がアイヌ民族の主要産業であり町の観光産業にもなっている。こうした背景から中学校でも町の主要工芸の技術を体験してみるために始まった。授業目的は、①木彫制作を通して生徒の表現力を高め芸術愛好の心情を育てる。②地域の木彫家の協力を得て、専門家の厳しい職業意識に触れさせ、地域産業として高い技術を誇る木彫工芸の世界を理解するとともに、地域に根差した教育活動の推進を図ることとされる[8)]。全学年で10月から１月のあいだ15時間かけ阿寒湖アイヌ工芸協同組合や温泉街店舗の人々を講師に招き、下絵から彫りまでの全工程の指導を受け完成させる。B4サイズの板に各自の独創的なモチーフを彫ることになる。アイヌに関係するモチーフの必要はない。時間をかけた作業であり、３年生で経験を積むと完成度も高い。完成品は街の公共機関や店舗などで展示し発表される。これは生徒のモチベーションを高めることにもつながる。地域に根差した活動として定着しており世代を超えた活動で、アイヌ工芸や家業の土産物店などで活躍する人も多くいる。

このほかに、道徳教育の中でもマリモの自然保護活動やアイヌ民族との共生などが盛り

込まれており、学校通信の『湖中だより』には、学校長が次のようなアイヌ語の格言を引用し生きることの大切さを説いている。「カント　オロワ　ヤク　サクノ　アランケップシネプ　カ　イサム（天から　役割なく降ろされたものは　ひとつもない）」を引用し、人は、他者や社会とのかかわりの中で様々な役割を担いながら生きていること。生涯の時間の中で変化し積み重なりつながっていくものと、生き方と役割のつながりをアイヌ民族の知恵を引用し説いている[9)]。

阿寒湖中学校のアイヌ文化関連の授業はこのようにおこなわれている。総合的な学習の時間を中心におこなわれているが、美術・音楽など教科も協力している。また社会科の中では郷土学習として、町のでき方やアイヌ民族の歴史に触れる。時間数的にはさほど多くはない。民族出自の生徒も⅓程度おり、町の主要な産業を担っている人々の事柄でもあり、体系的に学習ができることが望まれる。しかし、現在の中学校では学習項目が多く、高学年では受験を念頭にしたカリキュラムを組む必要もあり、アイヌ文化学習に割く時間を確保するのも厳しいところがあるようだ。

釧路市ではコミュニティ・スクール構想がすでに始まっており、この阿寒湖畔でも小学校は2014（平成26）年度より、中学は2016（平成28）年度より指定を受けている。地域とともに子どもを育てる教育の一環として、阿寒湖畔ではこれまでの経緯を踏まえアイヌ文化学習がクローズアップされ行われているといえる[10)]。次世代の子どもたちのために地域を挙げて連携し協力体制を取り、学校教育の充実を図り、地域の理解や地域創成に結びつけていこうとしている。こうした学習を通して、子どもたちが地元について愛着感を持ち、誇れるように期待されている。中でも３割に上るだろうアイヌ民族出身の子どもたちが自民族を誇りにし、自己肯定感が高まっていくことにつながれば、教育の効用ということが言えるだろう。

## ５．阿寒湖畔におけるアイヌ文化学習とは

ここまで、阿寒湖畔の小学校と中学校でのアイヌ学習のあり方を見てきた。総合的な学習の時間などを使いながら、小学校では「アイヌ文化名人」という単元でアイヌ文化学習、特に歌と踊りを学習し地域で発表していた。中学校では「ふるさとさタイム」として学年ごとにアイヌ文化やアイヌ民族と地域産業と関連する事柄を学習している。こうしたことによって地域の中で児童・生徒たちがアイヌ民族とのつながりを意識し、アイヌ民族の子どもには自民族の文化を学校教育の中で学ぶという経験をしていくことになる。地域産業の中でアイヌ民族の存在が大きな位置を占める地域だけに、地域からの意見などを取り込み学校教育で行われている。これ自体は阿寒湖地域に住む人々にアイヌ民族やアイヌ文化の理解を促進させるには効果的であり、また、アイヌの子どもたちの自尊心を高めていくという点で機能しているとは考えられる。しかし、こうした授業では、以下のような問題点が指摘できる。それは、アイヌ民族の置かれた状況や社会的な葛藤を理解していくことができるのかという問題である。文化学習だけでアイヌ民族と和人との関係を理解することは難しい。相互の理解、共生する地域社会を築くためには、これまでの阿寒湖畔での両者の関係を見つめ直すことが重要なことになる。

たとえば、阿寒湖畔は観光地産業で成り立っている町である。温泉ホテルや土産物店

などが軒を並べている。しかし、その中でアイヌ民族の資本で経営されているホテルはない。「アイヌコタン」はアイヌ民芸の土産物店が集住するエリアで大型の劇場もあり、阿寒湖観光のスポットでもある。ところがこの地域はアイヌ民族の人々の所有ではない。アイヌ民族の社会状況を改善し自立を促すために1959年に前田一歩園財団の前田光子が公的事業として無償でアイヌ民族に提供したものである。高度経済成長期の観光ブームに乗りアイヌ民族の人々が職を求め集まってきた。アイヌ工芸協同組合ができ、阿寒アイヌ文化保存会や各店舗の努力により現在のような「アイヌコタン」となった。しかし、アイヌ民族の人々の生活は経済的に豊かなわけではない。学校全体の子どもの家庭環境を見ても、町の就学援助支給率が35％、生活保護率が４％、片親世帯が36％であり[11]、経済的に恵まれている地域とは言えない。アイヌ民族の経済的な劣勢、貧困問題は以前から長く続いている。そしてそこには民族的な差別問題が近年まで影を落としていた。

これまで児童・生徒の少なからぬ数でアイヌ民族の子どもたちがおり、学校では差別やいじめが行われていたという。現在小中学校ではアイヌ民族の子どもたちに対するいじめはないと各学校長は言う。町がアイヌ民族と共生しているからと楽観的にとらえるわけにもいかない。今の大人世代が子どもの頃は子どもの人数も多く、相対的に少ないアイヌ民族の子どもは差別され、いじめられていたことはアイヌコタンで行ったインタビューでも聞かれた[12]。こうしたアイヌの子どもへのいじめ問題を改めて考えることは人権教育の上からも重要なことではないだろうか。アイヌ民族を語る上で差別と貧困を排除することはできない。民族的な尊厳にかかわり、日本のスティグマでもあるからである。学校教育の中でこれらを学ぶことが、当該の地域であればなおさら必要なのではないだろうか。

現在、故郷の伝統や文化を学び、ふるさとに愛着と誇りを持つ郷土教育がふるさと学習として、標榜されている。そのようなふるさと学習にとって阿寒湖畔のアイヌ民族の歴史と人権の視点は周知されるべき学習ではないだろうか。和人とアイヌ民族という民族的な相違が生み出す確執や貧困をめぐる人心のあり方まで掘り下げることは人間性を熟考する道徳観の育成に大きく寄与することになるだろう。そして今日、多様性が一つの価値となり、町づくりにとっても民族共生が不可欠な要素であることが再確認されている。こうした状況の中でアイヌ民族の子どもたちにとっても、アイヌ民族に関する学習は自己肯定感の育成につながるといえる。さらに一般的な舞踏や工芸に限らず、アイヌ民族の言語や文芸、伝承や思想など先住民族としてのアイヌ文化の様々な様相を学習できるようになれば、より一層民族的なアイデンティティや共生社会の意義を理解することにつながっていくのではないだろうか。

## おわりに

阿寒湖畔の町は古くから観光産業で成り立っている。温泉街の人々とアイヌ民族の共存共栄関係は戦後になり、地域の開発保全を行っている前田一歩園財団の前田光子の指導で積極的におこなわれるようになった。近年になりアイヌ民族の地位が認められ、また同時に国の観光政策が活性化されたことで、阿寒湖畔は活況を呈するようになっている。小中学校でのアイヌ文化学習もこうした地元の

文化を理解し、地域の創生に役立てるといった背景が大きく影響し、時間が割かれ行われているといっていいだろう。

小中学校ではアイヌ民族についての文化学習は行われているが、アイヌ民族に関する歴史や人権学習という面から扱うことがほとんどない。このようなあり方でアイヌ民族についての理解を深めることはできるだろうか。阿寒湖畔ではアイヌ民族の事柄について教える人材も豊富であり、生活の中で学ぶこともできる。こうした利点を有効に使うことでアイヌ民族を自他ともに理解する学習ができるだろう。一般的な文化学習にとどまらず、社会での共生を目指した観点や先住民族として独自性を学ぶ教育が行われることが可能なのではないだろうか。そして実践していくことがアイヌ民族の存在を社会的に揺るぎなないものにしていくことになるはずである。

## 註

1）釧路市立阿寒湖小学校「釧路市教育基本計画」『平成29年度　湖小の教育』2017年　基本５頁。

2）同上「釧路市教育基本計画」基本10頁

3）イオル再生事業とはアイヌ文化振興法で定められたアイヌの伝統的・文化的生活を復元するために自然環境の復元整備などする政策。イオルは伝統的生活空間を意味する。

4）上野昌之「アイヌ文化の振興に関する考察－阿寒湖アイヌコタンの実例を中心に－」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要別冊』第８号- ２　2001年。

5）北海道教育委員会「アイヌの人たちの歴史・文化等　釧路管内　釧路市立阿寒湖小学校」『平成27年度北海道ふるさと教育･観光教育実践事例集』2016年。

6）まりも祭りはアイヌコタンが中心となり進められるので古式の儀式などの準備などをアイヌの子ども手伝う。その中でアイヌ民族の伝統を学んでいる。

7）釧路市立阿寒中学校『平成29年度　教育経営』教務10頁　2017年。

8）同上

9）『湖中だより』No.9　釧路市立阿寒湖中学校　平成29年12月　１頁。

10）釧路市教育委員会編『コミュニティースクールのすすめ方』2017年　pp.30-34、pp.65-71。

11）前掲『平成29年度　教育経営』「学校経営の基底　保護者、地域の現状」。

12）阿寒アイヌ協会会長 談（2017年10月２日インタビュー）